

令和六年度「大切な命を守る」全国中学・高校生作文コンクール
警察庁犯罪被害者等施策推進課長賞 受賞作品

『一人一人の心得』

群馬県

安中市立第二中学校 三年

すとう ゆずね
須藤 柚音

私は「共に生きる」を読んで犯罪被害や交通事故被害に遭われた方々、またそのご家族が心に深い傷を一生かかえ続けて生活しなければいけないのかと思うと辛くなりました。いつも通りに過ごしているだけなのに人の人生は一瞬にして壊れてしまうことがある、だからこそお互いが危機感を持って行動しなければならぬと思いました。

交通事故というものは自分がいくら気をつけていても相手の気が緩んでいたら結果は同じになっていってしまいます。被害者の方々はきっと「あそこを通っていなかったら」、「一分でも遅く、または早く通り過ぎていたら事故に巻き込まれずにすんだかもしれない」と自分を責めてしまうかもしれません。ですが被害者の方が自分を責める必要はないと思います。確かに車は便利な乗り物だと思いますが、その反面人を傷つける物にもなるので交通事故故をなくしていくためには、命を奪う運転をするのではなく安全にどんなときでも真剣に向き合っていくことだと考えました。

被害者の家族や遺族の方は私が想像できない程の苦しみの渦の中で暮らしていたのだと知りました。私は家族がいなくなってしまうたら心のコントロールが出来なくなったり、感情が分からなくなると思います。だからこそ手を差し伸べる、ありきたりな言葉を言って慰めるよりも、ただただそばで寄りそうことが一番気持ちが救われるのではないのでしょうか。被害者支援センターで働いている方々がいて心の支えになっていることを知り勉強になりました。

私の通学路には長い直線で車のスピードがすぐく出てしまう田んぼ道があります。そこは事故が多く亡くなっている方もいるそうです。なので通学するときには車に飛び込まれないように停止線よりも手前で止まり、車をよく見て通るよう気をつけています。

私も自転車に乗っているのので、事故を起こし加害者にならないための安全運転を心掛けようと改めて思いました。

年々交通事故が増えている日本で事故をなくしていくためには、ドライバー一人一人が免許を取得したての気持ちで慎重に行動していくことだと思います。そうすることで加害者も減り、人々が安全に生活できるようになると思います。

将来、もしも車を運転するようになったときには、ルールを守り危機感を持って運転をしていきたいと強く思いました。